

■■■ 猪の話Ⅱ ■■■ == =>猪の話

日本には昔猪がたくさんいて、その数は実におびただしいものであったようです。それで今からざっと二四〇年前の元禄年間に、長崎県の対馬では一〇年ほどの間に、八万何千頭の猪を捕ったことがあります。そのころ対馬の人口は三万余ですから、人間の数よりはるかに多かったわけで、その害もまた今日とは比較にならなかったのです。それで猪を捕る狩人も多かったのです。

昔の狩人は、猪を捕ると（鹿も同じ）、第一に山の神様にお祭りをしました。そのときは、耳と、頸や脚の毛をきって、串にはさんで供えたり、内蔵を取って供えることもあります。神様をお祭りする理由は、猪を捕っても、それが自分一人の力ではない、神様が協力して下さったと信じているからです。だから捕ればすぐその場で祭りをします。

私は獣や狩の話が好きなので、各地を旅行するたびに、それを聞くのが楽しみです。それで方々で見たり聞いたりしたことがたくさんありますが、その中で珍しいお祭りの作法を一つお話してみましよう。

今から一〇年近く前に、九州の宮崎県西臼杵郡の山の中でした。そこは熊本県との境に近いところで、以前から猪がたくさんいるので有名なところでした。昔からの狩の作法をよく知っているお爺さんの狩人にあいました。狩人というと、山の中ばかりにいるから、ためになるようなことは、何も知らぬだろうと思う人もありましようが、たいへんな間違いです。日本人の歴史を知る上に必要な、大切なしきたりや言葉を、口々に伝えていきます。その中には書物にもない珍しいことも少なくありません。そのお爺さんの狩人もそういう言い伝えをよく記憶している一人でした。

猪を捕るには、罠をかけたり、おとしあなを掘ったりして捕る方法もありますが、もっとも多いのは、八人とか一〇人とか組を作って、猪を追い出して捕ることです。その組には組長のようなものがあって、そのものの指揮で捕るのですが、これには犬を使うのがふつうです。昔は槍や弓を使いましたが、今は多く鉄砲を使います。そして最初に猪に傷を負わせたものを、初矢といって大きな手柄になるわけです。

猪を斃すと、前にいったように山の神様をお祭りするのですが、その時はまず猪の腹を割いて心臓を取り出します。そうして、かねて用意に持っている白紙を出して、その白紙の中央を、獲物の血で紅くまんまるく染めます。でき上がったものは、私たちの大好きな日の丸の旗と同じようなものです。その紙を竿につけてその場に立てるのです。

この旗は山の神様のしるしで、すなわちお姿であるわけです。それで仲間のものでその前に集まって、お礼の詞をのべ、前の心臓を串にさして供えます。一々言葉では言いませんが、その次第は、一同が神様の下に一つ心になってたがいに励み合うことを固く誓うのです。そうしてから、その猪をかついで一同山を降りるのです。その道々山の神様の神歌を合唱して、時々鉄砲を撃ちます。その音を聞いた家のものは、女も子供も途中まで迎えに出るのです。兵隊さんの凱旋に似ています。

山の神のしるしの旗に一同が集まって、神様に誓いを立てることは、私たちが国旗を掲揚して、その下に集まることに、とてもよく似ているのに気づくと思います。そうしてその旗は、紙で作られた粗末なものですが、中央を紅地に染めたところは、やはりよく似ているのです。これを思うと私たちの国旗の掲揚式は、他の国の風習をまねたものでも、また、勝手に考え出したことでもなかったのです。狩人たちは昔からのしきたりとして、行っていたことを考えると、きっと大昔からあったことにちがいありません。

わが国の日の丸の国旗は、太陽をかたどったものでありますが、いつ誰がはじめて考えたものかまだわかりません。わかるのは、大昔からあったということだけです。

もしかしたら、私たちの祖先が神様をお祭りする時に、神様のしるしに動物の血で染めたものが、なにか関係あるかも知れません。